北海道胆振東部地震から５年

心をつなぐ

～５年への想い～

大きな被害を受けた
富里浄水場の変遷

朝霧に包まれた田園に、オレンジ色の光が広がり始めました。

柔らかな光は、モノトーンの世界に彩りを添えていきます。生命力の強さを感じさせる反面、「あの日」を思い出させます。

平成30年9月6日。雷鳴が収まり、やや湿度の高い静寂な夜でした。虫の音が響く田んぼは、収穫が迫った黄金色の稲穂が実っていました。見慣れた郷土の景色がそこにありました。

夜明け前の午前3時7分59秒。突如として、激しい揺れが町を襲いました。暗闇の中で広がる恐怖や不安。日の出と共にあらわとなった変貌した景色にただただぼうぜんとするばかりでした。

北海道観測史上で初めて記録した最大震度7の直下型地震は、「平成30年北海道胆振東部地震」と名付けられました。明治期以降で国内最大規模の斜面崩落をもたらし、町内では土砂災害で37人の尊い命が犠牲になりました。

あの日から5年。町民は心をつむいで前を向きました。手を携えながら苦難を乗り越え、開拓期から続く自慢の郷土を取り戻してきました。誇らしい日本の原風景には、町民一人ひとりの思いが重なっています。

町民は自然の豊かさに加えて「人が町の財産」と声をそろえます。高まる防災意識の中で、新たなコミュニティーも芽生え始めています。互いに思いやる絆は、「心のかけ橋」となって、これからも時空を超えてアーチを描き続けます。

願う

全国高等学校総合体育大会にご臨席された秋篠宮皇嗣殿下と同妃殿下が7月22日、厚真町をご視察され、復興状況の説明を受けられたあと、つたえり公園の慰霊碑をご覧になり、地元の小中学生たちと復興・森林再生記念植樹をされました。

秋篠宮ご夫妻と一緒に後列で植樹する小山さん（後列左）と北島さん

宮坂町長から慰霊碑について説明を受けられる秋篠宮ご夫妻

秋篠宮ご夫妻は、最も被害の大きかった吉野地区をご覧になられ、総合ケアセンターゆくりをご訪問されました。室内では、被災3町の宮坂町長、及川町長、竹中町長からこれまでの復旧・復興状況などの説明を聞かれ、ねぎらいのお気持ちを伝えられました。

植樹会では、厚真中央小学校6年の永澤律さんが秋篠宮皇嗣殿下に、上厚真小学校6年の三浦菜さんが秋篠宮皇嗣妃殿下にじょうろをお渡ししました。

お二人が、アカエゾマツの苗木を植えられるのに合わせて、後列では厚真中学校3年の小山蒼太さんと厚南中学校3年の北島未聖さんがコブシの苗木を植樹し、ご夫妻と共に森林再生を願いました。

育む

地震があった平成30年9月、新たな3人の命が誕生しました。両親の愛情に包まれて、間もなく5歳の誕生日を迎えます。こども園つみきに通う遠藤悠真さんと大垣弥代さん、宮の森こども園に通う末廣真さんは、健やかに時を刻んでいました。

5歳になる大垣弥代さん、末廣真さん、遠藤悠真さん（前から）

末廣（すえひろ） 真（まこと）さん
父・毅司さん　母・梨絵さん

当時、浜厚真の社宅で生活。梨絵さんは、1歳の長男と一緒に出産準備で室蘭市に里帰りし、たまたま休みが取れた毅司さんも地震前日に梨絵さんを訪ねて難を逃れました。「真は、補助輪なしで自転車を練習しています。元気に成長してほしいですね」

遠藤（えんどう） 悠真（ゆうま）さん
父・聖也さん　母・さやかさん

当時、聖也さんは東京に出張中で、臨月のさやかさんが留守宅を預かっていました。停電や断水に不安を抱き、苫小牧市内の姉の家に身を寄せて出産し、帰宅しました。「今では弟の面倒を見るようになりました。兄弟仲良く、元気に育って欲しいです」

大垣（おおがき） 弥代（やよ）さん
父・勇人さん　母・加那絵さん

当時、子育て支援住宅で生活。2歳の長女と親子3人で就寝中に地震に遭いました。ぎりぎりまで待って苫小牧市内の産婦人科に向かい、元気な産声に喜びをかみしめました。「家も新築し、大きな出来事が続いた5年間。家族仲良く歩んでいきたいです」

伝える

町観光協会は、令和元年4月から被災地ガイドツアーを開始しました。現在、8人のガイドが、自分の体験を交えながら参加者に胆振東部地震を語り継いでいます。

厚幌ダムで、被災地ガイドの説明を聞く豊園小の児童

厚幌ダム周辺の被災状況を説明する被災地ガイド

今年のツアーは、12月までの予約を含めると、50件約2千人の利用が見込まれています。利用件数は前年比の2倍以上で、学校利用に加え、少人数の個人での利用が増えています。

6月30日、札幌市立豊園小学校の6年生93人が、大型バス3台に便乗して訪問し、ツアーに参加しました。厚幌ダムに到着すると、児童たちから質問攻めにあいました。「あそこの茶色い斜面は、地震で崩れたのですか?」や「茶色の斜面は、今も地震の時と変わらないのですか?」など、感心は尽きません。被災地ガイドの1人が「このダムは、高さが約90mあります。地震の時、このダムの大きさの山が大きく動きました」と説明すると、児童たちは真剣な眼差しでメモを取りました。

復活

胆振東部地震で被災した水田かんがい用の厚真ダムが復旧しました。4月3日から6月まで試験湛水が行われ、施設に異常はありませんでした。営農者が心待ちにしていた厚真ダムは、令和6年から全面的に供用を再開します。

右：試験湛水で本来の姿を取り戻した湛水時の厚真ダム
上：地震の爪痕が残る「厚真ダム」の銘板石

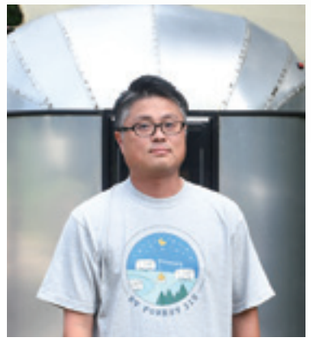
被災直後の厚真ダム
（左：洪水吐に流れ込んだ土砂や流木、右：厚真ダムの遠景）

厚真ダムは、地震によって堤体周辺ののり面や貯水池内の斜面が崩落し、土砂などが堆積。洪水吐（ばき）の損傷や取水放流施設操作室や浸透水量観測室が損壊。また、堤体下流部にも土砂等が流入するなどの被害を受けました。

このため、令和2年度から4年度にかけて、洪水吐の撤去・復旧やダム管理施設の復旧工事などが行われました。

また、ダムの築堤入口付近には、「厚真ダム」と刻まれた銘板石と碑文が移設されました。銘板石は、左岸のり面の土砂崩落に飲み込まれて損傷した跡が残っています。

インタビュー
5年を振り返って



貿易会社経営
佐藤（さとう） 稔（みのる）さん

地域おこし協力隊として平成29年に移住。胆振東部地震で自宅は全壊し、一家４人で避難所と仮設住宅での生活を経験。イングリッシュキャンプを企画。

―地震から5年が経ちました

移住して約1年半後に胆振東部地震に遭遇しました。最初の1年は、がむしゃらすぎて思い出せないというか思い出したくない気持ちでした。避難所の中央小学校で1カ月半、仮設住宅で2年生活。絶えず気持ちが張り詰めていて、怒りっぽかった。支えてくれたのは前向きだった家族です。「苦しんでいる人はまだいる」と、自分に言い聞かせていました。

―今年6月11日に震度5弱の地震がありましたが

あの時もそうですが、地震があると無意識に体が反応して飛び起きます。今も体が震えるのです。家族の安全を確認しますが、つらい気持ちは、なかなか抜けません。

―新たにRVパークを開設しましたね

緊急時の防災拠点にしたいと考えました。胆振東部地震の時、ボランティアの方が役場敷地内で車中泊できず苦慮していた。だったら、自分で作ってみようとね。普段はオートキャンプなどに解放し、災害時にも対応できるようにと考えました。現在、通年での運用を考えています。

―地震から得たものは

人です。やはり人の温かさでしょうか。近所の人には本当に良くしてもらっています。地震後に町内に留まり、人の手を借りながらも新町に手作りで家を建てることができたのも、人に魅力を感じたから。出会った人を大切にして、恩返ししたいと思っています。

厚真神社５代目宮司
中村（なかむら） 昇洋（のりひろ）さん

札幌市内の自動車会社から平成16年に奉職。愛称は「若さん」。人が集まりコミュニケーションが作れる神社にしたいと、「鎮守の杜マルシェ」を開催。

―地震から5年が経ちました

長男が今年、大学を卒業して就職したことを考えると、早いと感じる反面、まだ5年かとも想います。震災前の町内の景色が目に焼き付いているだけに、毎朝欠かさずお参りしています。

道内の神職で、避難所で約3カ月、仮設住宅で2年を過ごしたのは、恐らく私だけで、地震を伝えることが使命になりました。ひと息つく暇はありませんね。

―地震の翌年8月、義父で先代の黒澤壽紀さんがご逝去されました

全壊した社殿や社務所など、厚真神社の復興を誰よりも願っていました。最後の言葉は「あとは頼んだよ」。想像ですが、きっと喜んで見守ってくれていると思います。

―心のより所として苦労なされたのでは

町民の皆さんと個別に話す機会は多く、間一髪で命が助かった人などその人しか知らない経験談を聞くと衝撃的で、今も頭から離れません。皆さんには、同じ被災経験者としてありのままに接していただきました。苦労というより、心を許していただいたことに感謝しています。

―地震の経験から

仮設住宅時代、人がつながれる場所を作りたいと思っていました。妻に相談・協力してもらい昨年6月に開いた「鎮守の杜マルシェ」です。人と話すことでホッとし、気持ちは前を向きます。神職に就いて来年で20年。今後も「人のつながり」を大切にしていきます。

北海道胆振東部地震から5年を迎えるにあたり

厚真町長　宮坂 尚市朗

北海道胆振東部地震から、5年が経ちました。犠牲となられた37名の方々に哀悼の意を表します。全町民が被災者となったあの日から、必死に生きるという根本的な命題を見失わずに、懸命に努力を重ねてこられた皆さまに心から敬意とお見舞いを申し上げます。

この5年間、復旧事業は加速し、インフラの復旧は、本年度で大きな節目を迎えます。森林再生は、令和8年度までを重点期間として、さらに促進してまいりますが、心のサポートや宅地耐震化事業は、丁寧な対応を心がけます。

本町は、本格的に復興への取り組みに挑戦します。自然災害に備えての庁舎周辺整備や防災・減災対策、エネルギー地産地消や省エネルギー・創エネルギー・吸収源対策を官・民・学で総合的に取り組んでいくカーボンニュートラル政策を展開し、復興の新たな骨格とします。併せて分野別IoTやSociety5.0などを取り込みながら次世代に向けた地域創生というハードルに果敢に取り組みます。困難な道を選択しているように見えますが、先人が歩んだ道の先に、進むべき道があると信じています。

今後も命を守る防災・減災対策を牽引すると共に、「誰一人として取り残さない」を基本理念とする胆振東部地震からの復旧・復興にまい進し、「挑戦を諦めない町」として未来創生と持続的発展に向けた歩みを町民一丸となって進めてまいります。

主なできごと（令和4年9月～）

令和4年

9月3日(土)　北海道胆振東部地震厚真町追悼式
9月6日(火)　正午のサイレンに合わせて黙とう
10月18日(火)　町と厚真町社会福祉協議会が災害協定締結
11月12日(土)　平成30年北海道胆振東部地震災害支援感謝のつどい（厚真町社会福祉協議会主催）
11月12日(土)　幌内地区で町とイオン環境財団によるサクラの植樹会
11月29日(火)　2022オンライン座談会～胆振東部地震から4年、被災地の現在とこれから～（北海道主催）

令和5年

2月24日(金)　ひと育て・まち育てシンポジウム（日本地域創生学会・地域創生実践総合研究所主催）
3月2日(木)　鹿沼地区でドローン（小型無人飛行機）による災害時の物資輸送の実証実験
4月23日(日)　第20回統一地方選挙・厚真町議会議員選挙投開票（定数11人、立候補13人）
5月18日(木)　町とロンタイ株式会社が森林再生に関する協定締結
5月26日(金)　第1回厚真町津波防災地域づくり推進協議会
5月28日(日)　幌内地区で第73回北海道植樹祭（北海道など主催）
6月11日(日)　東和地区で森林再生に向けた植樹会（町など主催）
7月22日(土)　秋篠宮皇嗣殿下、秋篠宮皇嗣妃殿下が来町し胆振東部地震復興状況をご視察
8月4日(金)　胆振東部地震から5年シンポジウム～平成30年北海道胆振東部地震を振り返る、被災からこれまで。～（町主催）
9月2日(土)　北海道胆振東部地震厚真町追悼式 追悼式第2部「献歌」
9月6日(水)　正午のサイレンに合わせて黙とう